

**令和7年度 英語教育推進事業  
教育課程特例校における特別の教育課程  
【実施状況報告】**

**令和8年6月**

**池田市教育委員会**

## 1. 概要

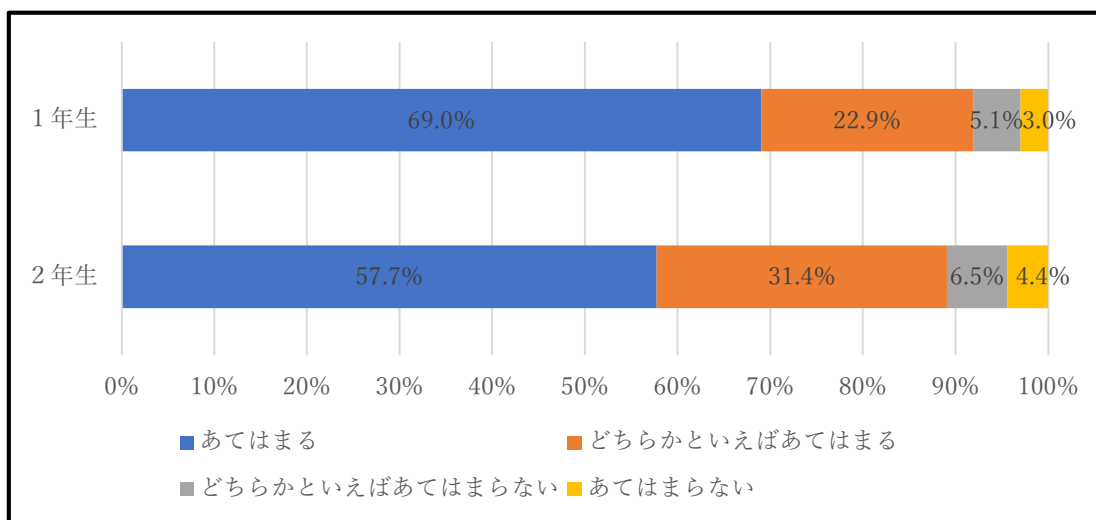
■池田市では平成16年3月に構造改革特別区域計画の認定を受け、「教育のまち池田」特区に取り組んできました。市立小学校全学年に「英語活動」を教科として導入（全学年 年間35時間）し、平成18年度より全小学校で実施してきました。平成20年7月より「構造改革特別区域研究開発学校」規制の特例措置が全国展開されたことにより、本市の特区認定は取り消され、文部科学省の「教育課程特例校」指定に移行し、これまでの特区内容の教育課程を継続実施しています。平成25年度に「教育課程特例校」の実施期間の終了を迎えましたが、平成26年度以降も継続を申請し、1～4年生における「英語活動」の授業を実施しました。現行の学習指導要領への移行に伴い、「英語活動」は引き続き1・2年生で実施し、幼稚園、小・中・義務教育学校での継続的な英語学習をすすめています。この1・2年生の「英語活動」は生活科の時間を活用して年間15時間実施しています。内容としては主に英語のリズムや音に慣れ親しむ活動を重点にし、挨拶や動作、身の回りのものを表す単語を題材にした活動を取り入れています。早期の段階から英語に触れることで、ことばや文化に対する関心を高め、正しく理解し、国際社会で生きる力を育成することをねらいとしています。中学年からの外国語活動、高学年からの外国語科への学びの連続性を意識して指導にあたっています。

■池田市では小学校6年間の英語の学習成果を検証するために、令和7年度は6年生の一部の学校を対象にGTECを実施しました。GTECとは、英語の4技能（聞く・話す・読む・書く）を測定する外部試験です。4つの技能を全てタブレットで測定します。子どもたちの学習成果を測定するだけでなく、課題をとらえ、英語の授業改善にも取り組んでいます。令和7年度の結果を下記に掲載いたします。

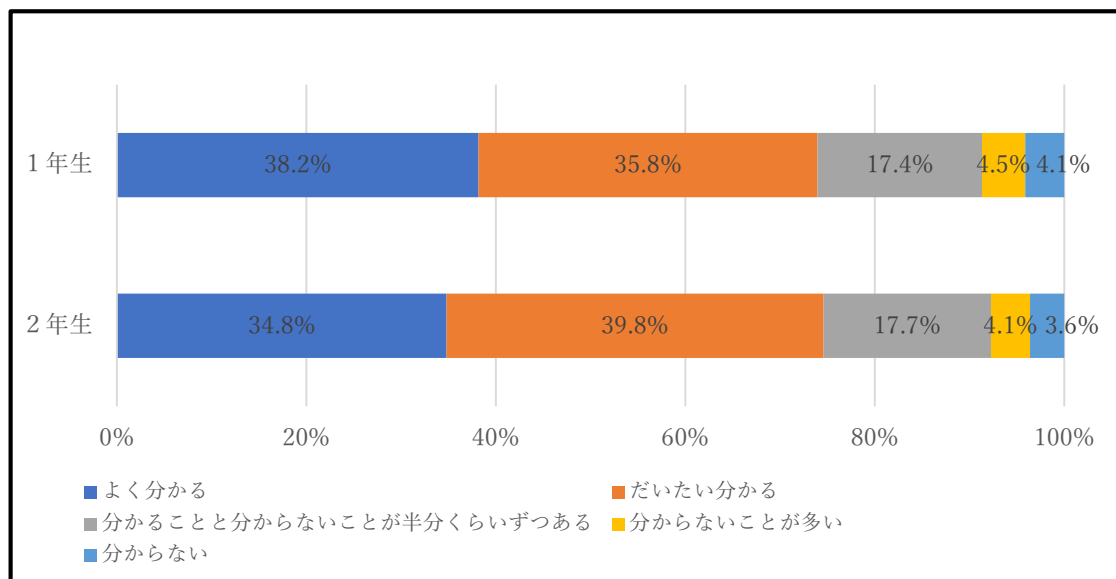
## 2. 池田市の児童アンケート結果

【小学校1・2年生対象（教育課程特例校における特別の教育課程を実施している学年）】

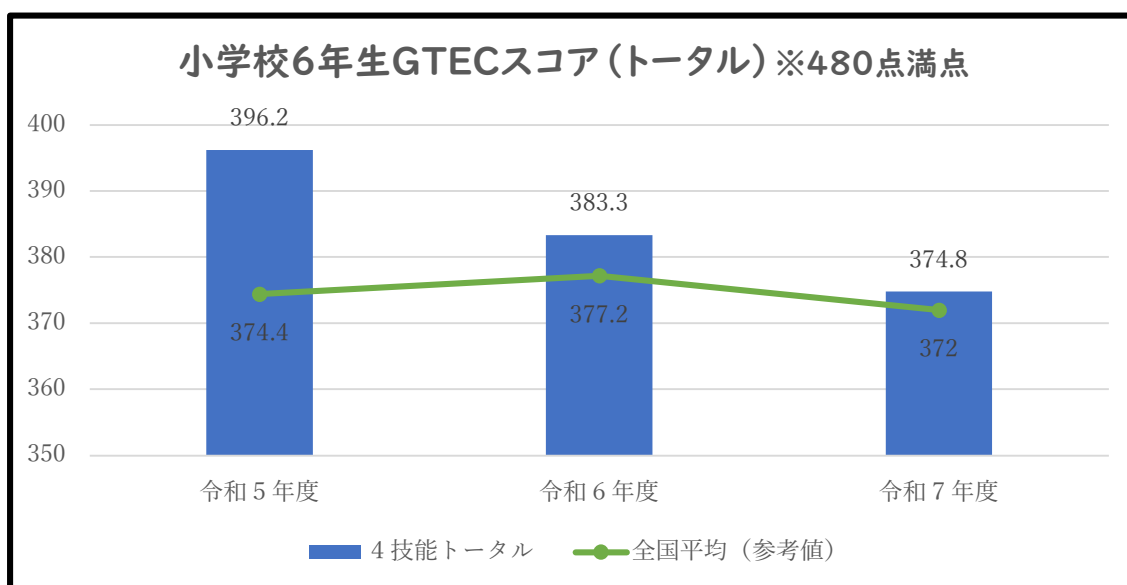
### ①英語の勉強は好きですか

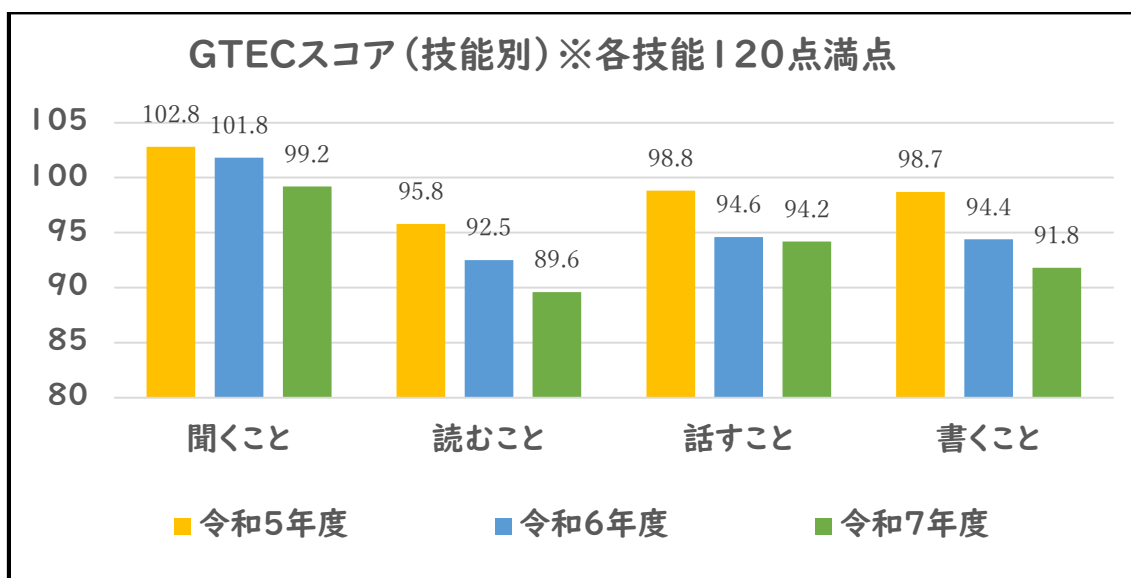


## ②英語活動の授業の内容はどのくらい分かりますか



## 3. GTEC のスコア推移 (令和5年度～令和7年度)





#### 4. アンケート等の結果より

低学年の児童のうち、英語の勉強が「好き」と答えた割合がおよそ9割と高く、多くの児童が前向きに英語に取り組んでいることがわかります。また、授業が「わかる」と答えた低学年の児童もおよそ7割を超えており、活動を中心とした授業が児童に適していると考えられます。これらのことから、低学年の児童は、英語の授業に対して、意欲的に取り組んでいることが窺えます。しかしながら、学年が上がるにつれて、英語の勉強が「好き」と答える児童の割合が低くなる傾向にあることもわかっており、複雑化する内容に対して、達成感を味わうことができるような場面を設定するなど授業改善が必要です。

令和7年度に実施した英語技能テスト(GTEC)の平均スコアは、これまでの傾向と同じく全国平均(参考値)を上回りました。「聞くこと」のスコアは120点満点中およそ100点を、「書くこと」のスコアは120点満点中およそ95点を推移しており、教師による英語使用やALTの活用が、一定の成果につながっていると考えられます。一方、「読むこと」については、90点を初めて下回りました。音声と綴りの関係(フォニックス等)の理解を図ったり、単なる単語の認知だけでなく、文構造を理解しながら読む力の定着を図ったりするなど、発達段階を考慮して、指導の工夫が必要です。

## 5. 英語担当教員アンケート(小学校1・2年生の英語活動について)

- ・低学年から英語に馴染むこと、英語に触れる機会を増やすこと、英語が耳に入ってくることは、英語に対する抵抗を失くすとともに、英語に親しむきっかけとなっている。
- ・低学年の子どもたちは、感覚的に ALT の英語を吸収しているように感じる。低学年で行うゲームや歌などの活用は、3・4年生の外国語活動のスタートにとっても良い影響を与えている。1・2年生の英語活動は、今後も継続していけるとよい。
- ・学校での英語活動について、家庭で話題になったり、英語でのあいさつや歌などが活用されている様子がわかり、子どもたちが英語を自然に活用する素地につながっていると考ええる。
- ・早期の段階から、ネイティブの方(ALT)と接することは、英語教育における有効な手段となっている。

## 6. 保護者・学校関係者等の評価

- ・1年生から英語を取り組むようになってからしばらく経ち、子どもたちの中でも英語に対する特別感をもたずに取り組んでいると感じる。
- ・外国籍の児童が増加している中、英語活動を通して、言語だけでなく文化にもふれられるよう機会を設定することで、多様性を受け入れ、ともに学ぶ姿勢が育っていると考えられる。
- ・小学校1年生から英語の授業があるのは嬉しい。今後も継続してほしい。
- ・大人になってから英語を学ぶと、頭で考えてしまう。感性豊かな子どもたちは、低学年から英語を学習するのがよい。
- ・英語活動に取り組むことで、言葉や態度として表現する力がつき、発話へのためらいもなくなってきた。

## 7. 今後に向けて

上記アンケート結果にもあるように、低学年から英語の授業を実施することについては、英語への親しみ、中学年における英語活動へのスムーズな導入、英語力の向上に寄与していることを、実感している人がいます。さらに、外国籍の子どもたちに対する理解や発話への姿勢、態度などについても影響を与えているとの声も挙がっています。教育課程特例校制度を活用することは、「聞くこと」「話すこと」の成果につながっていると考えられます。

一方で、中学年や高学年における英語に対する肯定感が下降傾向にあることや、「読むこと」の平均スコアの低下については課題があり、達成感を味わうことができる場面の設定や、音声と綴りの関係性、文構造などを理解したりする場面の設定などを取り入れるなど、授業改善を通して、小中学校における英語活動を充実させていきます。